特279-14
1200601101920

考古圖集

始

國立國會圖書館藏書
I種
W
1200601101920

考古圖集解說　第三十四集

殷虛號

支那河南省彰德府の殷虛は明治三十二三年の交の發見に係り商代貞卜の龜版獸骨片の出土に依りて支那古代史上重要なる位置を占むるものなり。遺跡の發見全く偶然に出でたるを以て當時學術上の調査を缺き、從て龜版文以外遺品の注意も佚せられしが如きも、此遺跡に特殊の興味を有せられし羅叔言先生は前後兩三度の實地調査に於いて多數の器物を採集して「殷虛古器物圖錄」なる一書を公にして、其の一部分を紹介せられ學者の注目を惹けり。京都帝國大學は羅氏より多數の遺品の寄與を受けたるのみならず、近時別に傳殷虛出土品研究上の好資料を得て、關係遺品の豐富を加へたり。依つて濱田教授の許可を得て、其の主なるものを採り、これに羅振玉氏の優秀品二三を加へて殷虛號を作製せり。但し白灰色の有紋土器片は既に本圖集の第十七に博物館收藏の同じ遺品を載せたるを以て省略に從へり。

殷虛の位置と其の遺物とに就いては羅氏圖錄の序言をはじめ、故林泰輔博士の「殷墟の遺物研究に就いて」（東亞の光第十四卷）内藤文學博士の「殷虛に就いて」（考古學雜誌第十二卷）等に詳しく、またこゝに收錄せる遺品の或物に就いては濱田博士の研究「支那古銅器研究の新資料」と題して國華第三十二編第六册に載せられたり。參照す可し。

(336)(337) 石斧及石庖丁

此の一類の石斧、石庖丁の類は羅叔言先生が殷虛より齎らされしものにして、圖版336の諸石斧は同氏の所藏に係り337の石斧と石庖丁とは同氏より京都帝國大學に寄贈して、同大學の陳列館に藏する處なり。石斧は何れも磨製にして、中に蛤刃の丸形品と、片刃の長き鑿形に近き類とあり。形狀滿洲旅順附近出土品に酷似するは興味を覺ゆ。石庖丁は何れも粘板岩を以て作れる楕形なるも、背に穿孔なく、磨研の度高からず、これに上邊の角に近きと丸きものとの二者あり、圖示せる完好なる一は長さ五寸八分なり。出土の狀態明ならざるも、今日なほ遺物の殆んど見るなき支那内地發見の石器として重要視すべきものたるや言を俟たざるなり。

(338) 龜版獸骨文片

殷虛出土の遺物として學者の耳目を聳動せしめたる貞卜に用ひられし斷片にして、其の表面に刻せる文字は現存支

1200601101920

那最古のものに屬す。此の龜版に就いては劉鐵雲先づ其の文字を聚集印行せしが、研究を大成せるを羅振玉先生の「殷虛書契考釋」となす。本邦にて其の研究を試みし學者に、故林、富岡の兩氏はじめ後藤朝太郎氏等あり。こゝに載せたるは右の龜版獸骨片中主として文中に「史記」の殷本紀に見ゆる帝王名の存するものにして、羅氏が多數の斷片中より檢出せし處なり。氏の釋文に從ふに、向つて右上より數へて(一)南庚、(二)羊甲(卽湯甲)、(三)小乙、(四)武丁、(五)羊甲、(六)且乙、(七)示王、(八)大乙(卽天乙)と讀む可し。

(339) 骨鏃貝鏃及銅鏃

殷虛出土と傳ふる各種の鏃を集めたるもの。圖は略ほ實大なり。中に就いて骨鏃は後藤君既に考古學雜誌に紹介せし事あり、貝製品また羅氏の圖錄に佩鏃として載す。但し本圖のものは太田貞造君の將來品なり。銅鏃は從來の著錄に未だ見ざるもの。圖示の三個は渡瀨二郎氏が龜版獸骨文、骨鏃と共に殷虛出土品として、彰德府にて採集、松本文學博士の紹介にて大學に寄贈せし六個中の一部なり。其の形式注意に値す。

(340) 骨製品及玉貝器

右端は骨製の尖頭器にして長さ五寸六分、斷面扁平、尖端の尖れるところ我が石器時代の遺品に見ると趣を一にす。二は骨製の裝飾品、長さ四寸八分あり、細長き魚形をなし、一端片刃の劍の如く、他端口を開ける鰓に似て、こゝに小孔を穿つ。蓋し紐を通じて器を腰等に垂下する爲なる可し。後世の魚袋と併せ見るべきもの、器の兩面には輪廓に沿ひて鴟龍形・蟬形に近き文樣の表はされたるを見る。圖の三は帶銙かと考へらるゝ長方形の石製品(長一寸六分)また四は貝製裝飾品の殘缺なり。「殷虛古器物圖錄」にこれに似たる遺品を載せて羅氏は珧殘器とせり。

(341) 骨斧及貝貨

ほゞ實大に圖示せり。向つて右方の四個は何れも骨斧なり。太田貞造君の將來して大學に寄贈せるもの、頭のボタン狀の遺品は羅氏の圖錄に完好品を見るも、其の部の大形になりて刻紋あるは稍〻異例とす可し。左端の一同じく骨製の丸形品にて中央に貫通孔あり。用途明ならず。貝貨四個は長さ七八分の間にあり、何れも子安貝の表皮を削り去りて橢圓形の孔を穿てるもの、羅振玉氏が殷虛より將來せし遺品の一なり。貝貨に就いては羅氏の「俑廬日札」(國粹學報己酉第二號)濱田博士の「支那古代の貝貨に就いて」(東洋學報二ノ一・三)等の考說あり。支那最古の貨幣なるは顯著なる事實とす。その貝を以て作れる始源の遺品なるは滿洲鳳家氏發見品と共にまさに重要なる資料なり。

(342) 象牙彫刻片

太田貞造氏の將來品にして京都大學收藏の殷虛出土と傳ふる遺品中最も注意を惹く一なり。(一)に竪二寸、橫二寸五分の象牙板に鴟龍形と雷紋とを併せたるが如き文樣を浮彫す。其の中央に丸き凹みの存するは饕餮の眼を表はせるものか、今ま一隅の凹入部に米粒大の青色の寶石嵌入を遺存するは興味ある事實なり。器板の上端に緣あり、また凸面を示せるより、もと鼎の如き圓形の器の表面に張れるものかと考へらる。(二)は同じく象牙製の刀柄と認むべきもの、長さ一寸、中央に紐なきを通ずる爲の穿孔あり。これに附けるものは恐らく銅刀子なるべきか。自餘の二は薄き骨片にして、共に鴟龍、饕餮の文樣を刻する處支那先秦の銅器に見ると手法を一にす。

(343) 骨製殘器

何れも羅振玉氏の珍藏に係る。(一)は彫象殘器、(二)は氏の疏匕とせしもの、また(三)は彫犀殘器にして、實大圖なり。三者共に表面鴟龍形より變化せりと見ゆる雷紋的の模樣を刻し、更に地紋として細紋を加ふる處、刻法の銳利精巧なる、稀に見るところなり。彫犀器は半筒形をなす。

(344) 銅器片及貝製品

上圖の銅器片は羅振玉氏の珍藏に係り。彝器の一部分と認む可し。三代銅器に通有の文樣を表はし、寶石を嵌入する處342の象牙器と竝び稱す可きものなり。下圖の貝製品また羅氏の所藏なり。其の一の我が子持勾玉と形狀を一にせるは感興を覺ゆ。

(345) 着彩瓦器

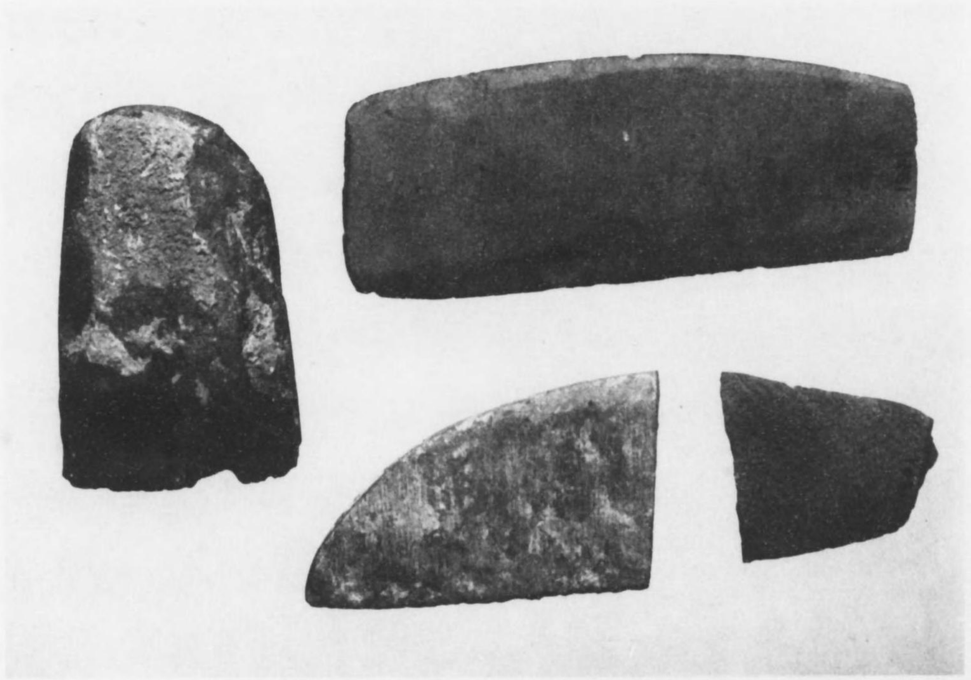
羅振玉氏の將來品にして殷虛出土と傳ふ。下半部を缺失せるも、現存高さ一尺三寸の大形の瓦壺にて、器の表面には刻りを示せる緣帶あり、頸部は方形を呈して長く、外側に獸環二個を附く。手法全く銅器のそれを移せるものなり。緣帶に朱を以て彩色せる迹をとゞむ。其の形奇古なるも製作の精緻なるより見れば或は漢代の作品とす可きか。なほ考ふ可し。〔梅原〕

磨製石斧
（羅振玉氏藏）

第三十四集（殷虛遺）

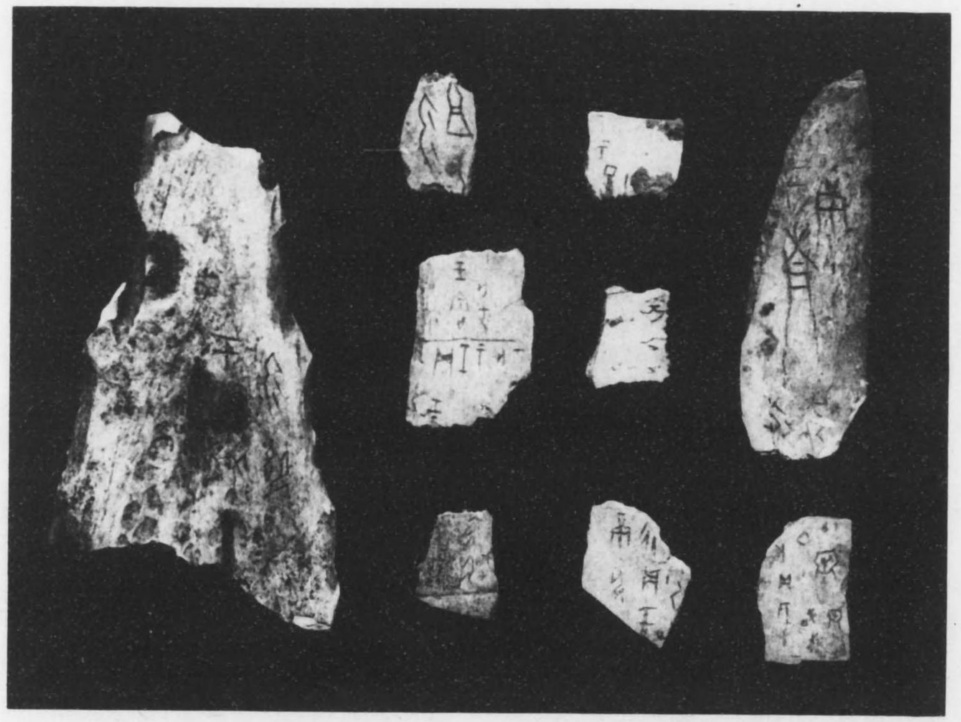
1200601101920

磨製石斧及石庖丁
(京都帝國大學藏)



1200601101920

（京都帝國大學藏）

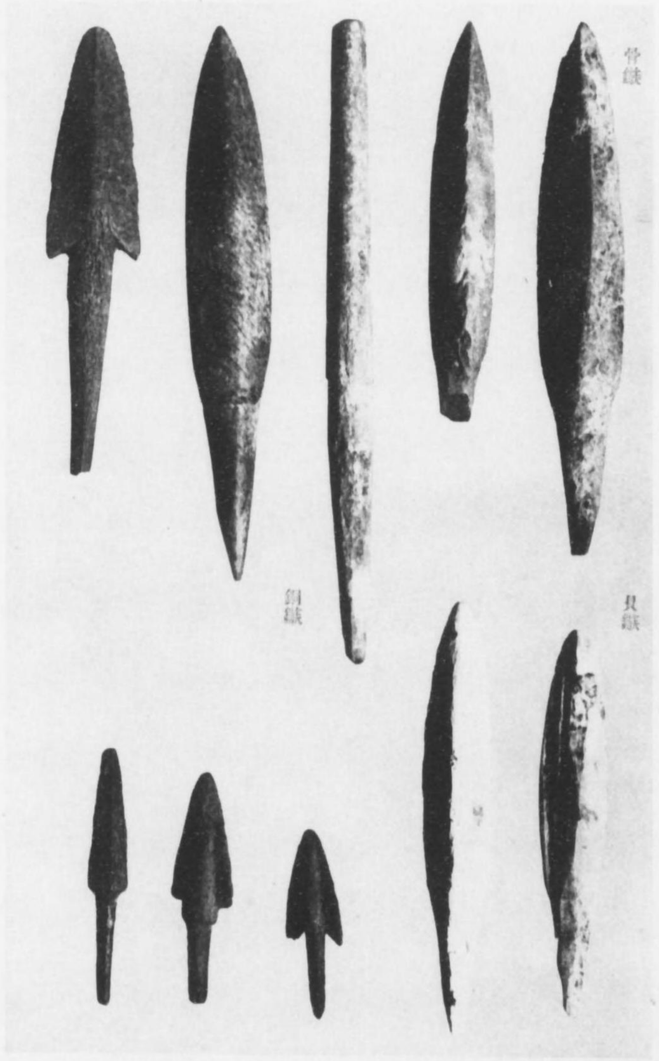


第三十四集（殷虛號）

1200601101920

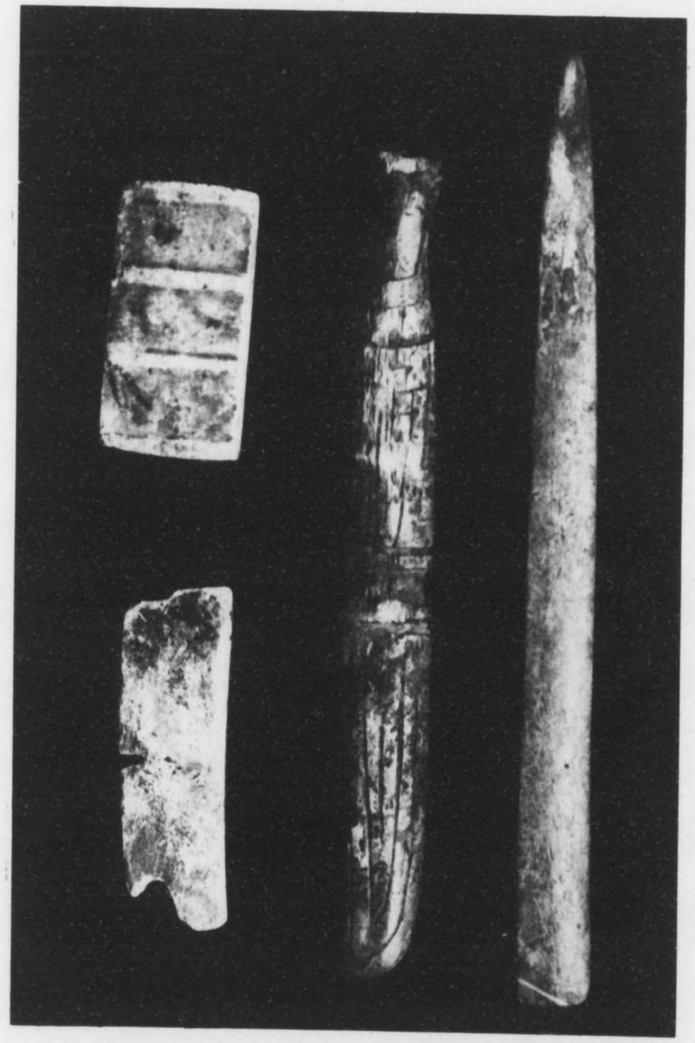
骨鏃貝鏃及銅鏃

（京都帝國大學藏）



1200601101920

（京都帝國大學藏）



第三十四集（殷虛號）

1200601101920

貨貝及笄骨
(京都帝國大學藏)

第三十四集(殷虛器)

1200601101920

象牙彫刻片
（京都帝國大學藏）

1200601101920

（藏氏玉振館）

第三十四集（殷虛號）

1200601101920

品製貝及片破器銅
（蔵氏玉振御）

1200601101920

彩瓦器

（京都帝國大學藏）

第三十四集（殷虛陶）

1200601101920

大正十三年一一月二十五日印刷
大正十三年一一月二十八日發行

不許複製

發行者 東京市牛込區上宮比町八十八番地 考古學會
代表者 東京市下谷區上根岸町八十八番地 高橋健自
印刷者 東京市神田區淡路町六番地 大塚檢
印刷所 東京市神田區淡路町六番地 大塚巧藝社
發賣所 東京市本郷區湯島町三十四番地 聚精堂

終